

世界における児童労働の現状と 支援のあり方について

— フィリピン、カンボジアにおけるストリートチルドレン支援に関わって —

小木曾 宏

1. 研究の目的

世界的に見て、児童労働の現状は深刻である。特に東南アジア、アフリカ、南アメリカでは、多くの子ども達が児童労働に従事させられているという。国際労働機構（ILO）の定義によれば「原則15歳未満の子どもが大人のように働かされている状況」として、そのような労働に従事するには、通常、義務教育終了年齢を下回らないことが原則となっている。しかし、途上国では実際に14歳でも労働に従事が認められている。そして、最も重要なことは18歳未満の子どもが行う〈最悪な形態の労働〉として、「人身取引・買春・児童ポルノ」の他に「子どもの健康・安全・道徳を害し、心身の健全な成長を妨げる危険で有害な労働には従事させてはならない」（ILO第182号条約）ことになっている。

しかし、ILOの調査報告によれば世界で「約2億4,600万人の子どもたち（5歳-17歳）が労働に従事している」とされ、この数は〈世界中の子どもたち6人に1人〉にあたる数字となっている。そして、最も深刻な状況として、〈最悪な労働〉に従事させられている子どもたちは世界で約1億7,100万にいと報告されている。

そこで、近年、そのような国々へ日本もさまざまなレベルの支援を行ってきている。しかし、欧米の支援やボランティア活動に比べると、日本の活動はまだ物質的支援が中心であると言わざるを得ない。

そして〈最悪な労働〉の一端として、日本でも「ストリートチルドレン」の実態が報道されるようになってきた。この状況にある子どもたちは、ILO第182号条約に照らしても、早期に改善しなければならない急務な問題であることは言うまでもない。

本研究の目的は、そのような状況にある子どもたちの現状を知った福祉系大学教員有志が中心となり、実際に現地へ赴き、現状を知るだけでなく、現地にはどのようなニーズがあるか調査研究を行う必要があると判断した。それと同時に、継続的に日本の大学生を主体としたボランティア実践の可能性を検討することを目的とした。

2. 研究の方法

(1) フィリピンにおける調査活動及びボランティア活動

① フィリピンの児童労働の歴史と現状

歴史的な視点から振り返ってみると、フィリピンでは、1900年代のアメリカ統治下時代から、多くの児童はタバコづくり、裁縫、飴包装の労働に従事していた。続いて1913年、第1回労働会議において「児童の擁護に関する緊急集会」により児童就労が減少するが、路上の商売（もの売り）に従事する児童が増加する。1946年就労児童人口が、73万2,749人（1939年）から90万1,300人（1953年）に増加したというカスタニエダという調査機関報告がある。

続いて、1965年から1971年の間、児童青年研究センター（Child and Youth Research Center）調査によれば、10-14歳の年齢の児童のうち、平均22.3%が労働人口に参加している。なお且つ、1968年5月から1971年5月間、労働人口の若年労働層の年齢別分布：10-14歳（21.9%）、15-19歳（43.1%）、20-24歳（35%）という報告がなされている。そして、5歳以下の児童は、最近の実態調査報告（Child Protection in the Philippines）によれば、28%が低体重（国際標準により比較）という状況にある。そして、11万3,040人に一つの病院。2万4,417人に一人の医師。2万2,309人に一人の看護師。57万8,124人に一人の歯科医。72万2,654人に一人の助産師という試算が出されている（1999年）。そして500万人の児童が労働に従事しておりそのうちの2/3は地方出身である（1995. UNICEF）。その上、国中に150万人のストリートチルドレンがおり、年間6,365人増加している。

さらに子ども達は、6万人が売春をさせられ、年間3,266人増加していると言われている（売春の多い国の第4位）。従って、およそフィリピンの児童の1/3は何らかの児童虐待の分類に該当しているという見解さえ示されている。（1996. マニラブリテン）

② 「カンルンガン・サ・エルマ」の取り組み

最初に同じ活動を行っている研究者が、岡山県の小学校教員が総合的学習で行った「ストリートチルドレン」の学びの集大成として、生徒と共に視察を計画していることを知った。そこで、その実施主体であるフィリピンのストリートチルドレン支援を行っているNPO法人「岡山ストリートチルドレンを支援する会」に大学生の「スタディー・ツアー」の企画を加えて頂くことを依頼した。

その依頼先は首都マニラで1988年から、Sol M Balbero氏を中心に始めた活動「カンルンガ・サ・エルマ」である。現在、欧米のキリスト支援団体や日本のNPO支援団体などの寄付により、施設運営や教育、啓蒙活動を展開している。

この支援団体の特徴を以下に記すが、その前にユニセフのストリートチルドレンの分類を提示したい。

〈フィリピンにおけるストリートチルドレンの3分類〉

レベル1：Children on the Street — 家族があるが、貧困で路上などで働き、収入は家計にあてて。 (60~65%)

レベル2：Children of the Street — 路上では働かず、路上生活をしている児童。さまざまな理由から家出をした児童で、ときどきは家に戻る (30%)

レベル3：Completely Abandoned Children — 親との関係が完全に絶たれ、長期に路上生活をしている児童。家族との生活体験がなく、あったとしてもそれを喪失している。(5~10%)

実は「カンルンガ・サ・エルマ」の活動は、この分類に対応して支援が行われている。

a) ドロップ・イン・センター

当センターは終日、開設していて、児童に対するベッドや食事の提供、国語、算数などの学習を行うとともに家族との関係調整も行っている。正に日本の児童相談所に附設された一時保護所の機能にあたる。しかし、大きく日本と異なる点は子どもたちが労働の合間に、何時でもここに来ることができる施設でもある。そして、現在、マニラ市内にこのような施設は数か所設置されている。もちろん、3つのレベルに置かれているすべての子どもたちが利用できる。

そして、生活が困窮して家庭養護が困難な親に同意を取りつけ、入所に至る場合もある。



〈写真1〉 ドロップ・イン・センター

b) 共同センター、トレーニングセンター

家族のもとに戻れない児童や虐待を受けた児童が共同生活をするセンターである。児童は近隣の学校に通学し、家庭的な雰囲気のもとで養育される。現在、センターの定員は60人であるが、新たに高年齢児童のグループホーム (20人定員) が開設されている。このセンター



〈写真2〉 共同センター



〈写真3〉 折鶴を折る子どもたち

は日本の児童養護施設や自立援助ホームにあたるものである。

このセンターに入っている子ども達はレベル3にあたる子ども達である。但し、ここに入所できれば近くの小・中学校に通うこともできる。しかし、実際に子どもに関わる支援スタッフは8名である。スタッフは1週間、泊まりこみで勤務している状況だと聞いた。

c) ストリート・エデュケーション

後述するが、児童労働の問題の本質とは、自分の子どもでさえも働かせないと生活ができないという大人の現実がある。つまり、子どもを学校に行かせる選択肢はないということである。そこで、子どもが学校に行く意味や必要性を親に理解してもらうように、啓発活動を行う必要がある。具体的にはサービスの内容を説明し、協力や理解を得る活動を行う。それと同時に、路上生活をしている子どもたちにも直接、支援が必要なときの連絡先を伝える。実際にそれらの活動を行うストリート・エデュケーターが、地域巡回を行っている。



〈写真4〉 学校教育の大切さを訴えるストリート・エデュケーター

d) 個別訪問に同行して

ストリート・エデュケーターは、気になる子どもたちのところに定期的に訪問し、様子を見に行くという。そこで、我々も同行することになった。最初に訪問したところは河川敷に建てられた到底、家屋とは言えないようなバラック建てに、3畳ほどのスペースに少年、母親、そして姉の3人が暮らしているという。訪問した際、少年は一人だった。少年の年齢は12歳である。定期訪問の目的はこの少年に、センターに来るよう勧めているという。しかし、母親と姉の収入だけでは生活できず、この少年は朝からスモークマウンテン（ゴミ山）でゴミ集めをしているという。視察団のメンバーが彼に「将来の夢は」と問うと少年は「エンジニアになりたい」と答えてくれた。



〈写真5〉 自動車を守る子どもと彼らの「家」

次に訪問した場所は駐車場の一角だった。この子ども（写真5）は、彼のとなりにある自動車が盗まれたり、車上荒らし等に遭わないように、持ち主から依頼され、一日中、監視しているのが仕事だという。それで日本円で言えば数十円の収入になる。母親も当然、毎日仕事に出ている。そして、彼の傍らにある荷車のようなものが、彼と母親の「家」だという。母親が仕事から戻ると、この「家」を安全な場所に移動して寝るのだという。

(2) カンボジアにおける調査活動及びボランティア活動

① カンボジアの歴史における特殊事情

1975年4月17日、首都、プノンペンに入城したのはクメール・ルージュ軍であった。そして、「革命」の名の下に、避難民も含めて、彼らが行ったことは国民を後で裏切ることになる。確かに、独裁王政や内戦に明け暮れたカンボジア人にとって、クメール・ルージュは本当の「人民解放」に向かう「未来」を信じたに違いない。しかし、そのカリスマ的な指導

者として実権を握ったポル・ポトは、全く異なる方向に歩み出し、縁故主義に急速に傾倒し「革命主義」の名の下に、「恐怖政治」へと突っ走ることになる。今回のツアーでも訪れた「トゥーレス・レーン」や「キリング・フィールド」はその歴史の癡痕を未だに昨日の如く、蘇らせる場所となっていると同時に、拭い去れないカンボジア国民の歴史的トラウマとなっている。確かに東南アジアの現状の中で、教育支援を必要とする地域は数多くある。しかし、カンボジアの特殊事情は、「旧体制」の知識人や政治家を牢獄に送り、処刑を繰り返した歴史でもある。その数は家族を含め、40万人とも60万人とも言われている。カンボジアは内戦や隣国からの圧迫を含め当時の混乱の中で、それでなくとも学校教育が維持できない状況に拍車をかけて、教育現場から突如、教員がいなくなるという現実、その国の「未来の崩壊」に他ならない出来事であった。

尚且つ、プノンペンに逃げ込んでいた200万の人々に対し、農村部へ強制的に移動させ、長時間に及ぶ労働に従事させた。その結果、極度の栄養不良と餓死が常態化したという。



〈写真6〉 ポル・ポトに処刑された人々（トゥーレス・レーン）

② カンボジアにおける新たな支援

a) カンボジア教育支援機構の活動

前述したような歴史から、今なお最も深刻な状況がカンボジアを覆っている。たとえば、国連児童基金（UNICEF）「世界子供白書」（2003年）によれば、カンボジアの乳児死亡率は、5歳未満児、1,000人に対して140人に達し、乳児死亡率においても97人となっている。

筆者は2007年、カンボジア教育支援基金（CEAF）の阿木昭男代表と出会い、カンボジアにおける支援活動を要請された。現在、①2007年9月、②2008年3月、③2008年9月と3回の現地調査とボランティア活動を行ってきている。

カンボジア教育支援基金（CEAF）は、元カンボジアのジャーナリスト、コン・ボーン氏

と協力をして、1993年から学校建設に取り組んできた。1999年には「カンボジア日本友好学園」を建設し、現在は中・高一貫校として、約800人の生徒が学んでいる。その後、CEAFは新たに、窮状に追い込まれている学校への支援活動を転換してきている。そして、教育支援だけでなく、福祉活動への新たな展開を模索しているところでもある。

b) 奨学支援金活動

CIEFは学校建設と同時に、カンボジアの子どもたちに対する奨学金支援を長く行ってきた団体でもある。一人の子どもに対して、年間、日本円で6,000円の奨学金を提供している。現在、友好学園は、日本以外からも多くの支援を得ることができるようになったため、その周辺にある公立学校の支援に活動の中心を移してきている。我々もスタディー・ツアーの度に、奨学金支援だけではなく、他の学校を訪れることができるようになった。そこでは、日本の折り紙や音楽の授業を、毎回展開してきている。



〈写真7〉 集団遊びを楽しむ子ども達

c) ストリートチルドレンの支援活動

フィリピンにもカンボジアにも「ゴミ山」と言われる場所がある。カンボジア、首都プノンペン、ストゥミンチェイ郡にある「ゴミ山」と言われる場所に隣接する支援施設に、2008年3月そして9月と続けて訪れた。そこは「Vulnerable Children Assistancc Organauization」という施設で、ゴミ山から来る悪臭が常に漂う場所でもあった。昨年、9月のツアーでは、大雨に見まわれ、グランドから施設まで辿りつくことさえ困難な状況であった。現在、この施設は世界各国から支援を得ている。しかし、周辺一帯は、1日400台以上のゴミ収集車が行きかう。多くの大人たちに混ざって、子どもたちもゴミを拾う。たとえば、空缶は10個で100リエル（2.5円）、空瓶は4個でやはり100リエルと、1日拾い続けたとしても数10円にしかならない。この施設では、数時間単位の教育プログラムを提供している。たとえ



〈写真8〉「ゴミ山」に入るボランティア

ば、午前中は就学前の子どもたちで、この施設に来ればジュースやパンの支給もある。午後は、昼間、「労働」に従事した高学年の子どもたちのためのプログラムを提供している。

そして、2008年9月（第3回）のツアーでは、「非正規教育機関」の実践活動の視察も検討された。そして今回、新たに「非正規教育機関」とつながることができた。それは「Street Children Assistance and Development Programme (SCADP)」という支援団体であった。SCADPは1992年12月25日にボランティアグループとしてストリートチルドレンの基本的な学習能力を身につけるために開始された。主な活動として、最初に保育センターや教育センターを立ち上げた。そして、カンボジア政府もNGO活動ではあるが「ストリートチルドレン支援プログラム」として公式に承認を得るまでに至っている。しかし、単に直接的に奨学金を与えるような支援だけでなく、カンボジアの抱える根本的な社会問題の変革も必要だととして、包括的な子どもの保護及び支援施策を見据えた活動を展開している。そこで、今回はその団体のスラム地区にある2か所の施設を訪問した。

しかし、実際には年齢もさまざまな子どもたち、約80人に対し、ギェウ詰め教室に、資格を持つ教師は1名と数人のアシスタントで授業が行われていた。その上、ノートを持参している子どもは少なく、古びた小さいボードにチョークで書いたりする子どもたちもいた。そこで我々は、日本で準備してきた幾つかのプログラムを実施することができた。たとえば日本の保育園などで、広く行われている「パネルシアター」を使って、動物の鳴き声を聞かせ、そこからその動物の名前を当ててもらおう。次に、クメール語（母国語）で動物名を覚えるプログラムを提供した。予め前日に通訳に協力してもらい、クメール語をスケッチブックに書いておくことができたからである。これはこのプログラムを効果的に進められる要因ともなった。その他にも体を動かすスポーツ、レクリエーション等にも子どもたちは積極的に

参加してくれた。今後、「非正規教育機関」に対し、カンボジアで有効な教材提供と開発が最も必要であると考えられる。そして、遊具等もほとんどないことから、その提供と定着を検討する必要があると感じられた。そして、何よりも現地スタッフの養成と継続的な財政支援が必要であるとも感じられた。



〈写真9〉 パネルシアターの実演

3. 研究の結果と課題

そこで、調査研究と実践活動により明らかになったことは、確かにまだまだ直接的な物質的支援も必要である。しかし、一方で子どもたちに良質で有意義な教育の普及を通じて、児童労働の撤廃を推し進めていくことが必要であるとも痛感した。実際に現地では公的教育も行われている。たとえば、UNICEF等の調査によれば、カンボジアでは小学校就学率は85.5%（女子：81.7%）であるが、中学の就学率は14.4%（女子11.6%）となってしまう。尚且つ、カンボジアでは、教師の地位が不安定である。我々が調査に入った学校では公立学校でも、給与が1カ月、30ドル程度の給与で遅滞も多い。従って、教師は副業を行わなければならない、折角、子どもが登校しても授業が行われないという実態もあった。

日本のマスコミもそういう傾向があるが、児童労働問題をその国における「貧困の象徴」として取り上げている。しかし、国際経済学的視点や国際政治的視点を抜きにしてこの問題は語れないことを改めて指摘しておけなければならない。反対にフィリピンやカンボジアを経済市場として扱い、先進国があらゆるレベルで市場参入してきている。

我々は、調査研究と同時に、現地におけるボランティア実践の可能性についても模索し、前述のようにカンボジアにおいて3回のツアーを実施してきた。今後、この活動を定期的実施して行きたいと考える。しかし、現在、年間2回（5日～14日間）実施するのが精一杯

の現状である。その原因は、活動経費の負担問題、現地受け入れと滞在環境の問題都等である。ただし、新たな人的交流として、カンボジア大学生の協力を毎回得ることができている。その学生たちは、ポルポト政権崩壊後、CEAFが1993年から学校建設だけでなく、子どもへの奨学金支給と教員への生活支援、日本からの多くの教育ボランティアによって支えられた子どもたちが大学生となり、我々の受け入れを支援してくれるようになって来ている。

参加した学生は、日本では決して、感じたり、考えたりすることのできない貴重な体験を持ち帰って来ていると思う。そして、真剣に、「支援することの意味」や「自分達のできること」を具体的に実行しようとしている。

先日、ツアーの反省会が行われた。その際、今回のツアーに参加してくれた学生がこのようなことを私に提案してくれた。「『ゴミ山』の施設に行った時、多くの子ども達が素足でした。本当にショックだった。だって、ガラス片で足を切ったり、注射針が刺さって感染症になっても薬が買えないですよ。だから私たち、(日本で) 実習に行ったり、お手伝いをしている幼稚園や保育園をお願いして、履けなくなった靴を集めてもらおうと思ってます」という内容だった。実際にその行動が実現するまでの幾つかの「カベ」があるのも確かである。しかし「ゴミ山」にいる子ども達とその靴を履くことができたとしたら、また新たな支援の道につながるであろう。

そして、もう一つ、新たな報告として、カンボジアのボランティア活動に参加した学生メンバー(大学2年生)が、昨年9月より、1年間、教育支援ボランティアとして、カンボジアのベトナム国境近く「プロムン・プロム校」に赴いて、活動を始めている。

〈参考文献〉

- ・ Maria Rosario Piquero Ballescás 著、河口・森・大森・井手訳『アジアの子どもの社会学－フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか』明石書店、1991.
- ・ 駒井 洋『新生カンボジア』明石書店、2001.
- ・ 上田広美、岡田智子編著『カンボジアを知るための60章』明石書店、2006.
- ・ 熊岡路矢『カンボジア最前線』(岩波新書) 岩波書店、1993.

The Present Conditions of the Juvenile Labor in the World and an Ideal Method of the Support

— From the support of street children in Philippines, Cambodian —

Hiroshi OGISO

I look worldwide, and the present conditions of the juvenile labor are serious, and the situation employed street children is particularly severe.

According to the definition of I.L.O., the engagement of labor under 15 years old is prohibited. In the developing country, labor can accept even 14 years old. And it is labor of the worst form that a child under 18 years old performs to be a problem most.

For example, it is human trafficking, prostitution, a thing such as the child porno.

However, I spoil the health of the child, security, morality, and ILO prescribes it when you must not let you engage in the dangerous, harmful labor to disturb healthy growth of mind and body. However, actually many children are employed in such situation.

We performed the fact-finding. This article reports the actual situation of the juvenile labor that therefore became clear. And I report the present conditions of the support.

I proposed the direction of the many outside state support to do including Japan, a university in particular and the possibility of the volunteer by the student in conclusion.